書　評

本多健一　著
『中近世京都の祭礼と空間構造―御霊祭・今宮祭・六斎念仏―』
吉川弘文館　2013年10月　281頁　10,000円＋税

本書は，中近世京都における御霊祭・今宮祭・六斎念仏を中心とし，その実態・変遷を解明しつつ，これらを取り巻く京都の都市空間・地域社会，あるいは社会環境との関係を探求したものである。その原形は，著者が2011年度に立命館大学へ提出した博士論文に大幅な加筆修正を加えて上梓されたもので，８本の既発表論文に新稿（序章・終章）が加えられている。

著者は，非日常的な事象たる祭礼のあり方を解明しつつ，それと日常的な事象のあり方とのつながりを比較考察し，「過去の世界」を理解するという新たな歴史地理学的アプローチを採る。

「祭礼において，それらに何らかの参画をする人々やその組織およびそれらの営みが，関連する地域で空間的拡がりをもって関係づけられているあり方」を「祭礼の空間構造」と位置づけ，16世紀を中心に，中世から近世にかけての連続性を意識しながら，祭礼と地域社会の関係を実証的に解明している。

すなわち，本書では，序章で述べられているように，中近世祭礼文化（史）研究を，文化史・歴史民俗誌的研究にとどめるのではなく，それらを基礎とし，都市史ないし歴史地理学的領域にも考察を拡大している。これまでの京都における祭礼文化（史）研究は，下京で行われる八坂神社の祇園祭の研究であったと言っても過言ではない。著者は，それが京都の一部の地域でしかなく，その他地域では異なる神社を氏神とし，別の祭礼が執行されていたことに注目し，上京の御霊祭，西陣の今宮祭，近郊の六斎念仏を考察対象とする。これらの諸祭礼を復原，比較しながら，剣鉾の分布にも関心を払い，京都における祭礼文化（史）の全体的な動向の解明を目指している。

本書の構成は，以下のように，序章・本論８章・終章から成る。本論の章題の後に付した（　）内は初出刊行年である。

序　章　祭礼と地域社会試論
第１章　中世祭礼における鉾とその変容（2010）
第２章　中世の御霊祭―応仁の乱後の復興まで―（2012）
第３章　16世紀の御霊社・御霊祭と都市空間（2013）
第４章　中世前期の今宮祭―祭礼行列の渡物と疫病対策―（2010）
第５章　中世後期の今宮祭と西陣氏子区域（2009）
第６章　近世後期の今宮祭と空間構造（2012）
第７章　近世六斎念仏再考（2009）
第８章　六斎念仏からみた近世の都市と周辺地域（2009）
終　章　概括および課題・展望

次に内容を章ごとに紹介する。

既述した，先行研究をふまえた本書の問題意識を提示する序章に続き，第１章では，中世京都の主要な祭礼行列に共通する鉾，なかんづく剣鉾に注目し，賀茂祭・祇園会・稲荷祭・北野祭・御霊祭などの事例を比較検討しつつ考察する。これらの祭は，民俗祭祀としての性格が色濃い御霊祭をのぞき，元来は国家祭祀的な性格を有し，御霊会起源の祭ないし影響を受けた祭であった。

鉾は14世紀に出現し，15世半ばに最盛期を迎え，祭礼ごとに独特の形態に成長し，16世紀前半には御霊祭において剣鉾が登場した。それらは，都市住民が京都全体の祭礼文化の主たる担い手となるとともに，同じ祭を担う氏子として精神的に結合されつつあった象徴であり，中近世京都に連続する強靭な経済力と文化的創造力とを示唆するものとする。そして，一度姿を消した鉾が16～17世紀にかけて新調され，新たな「鉾の時代」が始まったと見通している。

第２・３章はそれぞれ15世紀まで，および16世紀を対象時期とし，御霊祭を主に同時代古記録から復原・考察する。これまで古記録に現れる御霊社および御霊祭は，上御霊社・下御霊社のいずれを指すのか不分明であった。著者は，祭礼空間を復原しながら，各社の位置を丁寧に比定し，弁別したうえで考察を進めている。

その結果，13世紀には上御霊・下御霊の両社に分かれて祭礼が執行されており，14世紀末から京都の代表的都市祭礼の一つとなったことが明らかになる。

また，応仁の乱による中断後も信仰は綿々と続くが，16世紀には上京の上御霊祭の執行のみとなり，下御霊祭は，上京・下京に挟まれる「中京」の荒廃にともない衰退したと捉える。そして，御霊祭は，安土桃山期には秀吉の京都改造にともなって下御霊社・上下御旅所が移転を強いられたことに顕著であるが，都市空間のドラスティックな変化に最も影響を受けた祭礼と結論する。

第4・5・6章では，中世前期，同後期，近世後期の今宮祭が復原・考察され，「祭礼の空間構造」に迫る。

今宮祭は，平安期には疫病対策としての官祭的・臨時祭的性格を有したが，鎌倉末期から南北朝初期ごろ，すなわち14世紀前半から半ばに，御旅所祭祀を中心とし，一般住民が支える定期的・都市的祭礼に変容した。

16世紀におけるその実態・変遷の復原によれば，小地域間に序列ないし優劣を有し，また矛盾をも含む空間構造が顕現した。その「祭礼の空間構造」は時間的ないし歴史的な重層性を有したもので，その特徴として，①地域の社会構造や出来事など過去における現実が積み重ねられるように反映され，形成されていること，②それゆえ矛盾をはらんだ重層性を有していること，以上の2点が指摘される。長い歴史のなかで，ある地域における日常的な社会構造が変化したとしても，非日常的な祭礼の空間構造には，かつてのそれらが反映されたまま，次世代に継承されていく傾向があるとしている。

そして，近世の今宮祭の氏子区域に顕現する空間構造は，地縁共同体を4つの地域スケール，すなわち惣町（大仲），町組・近世村落，小組（組町），個別町に分類して考察すると，けっして平面的な多重構造とは言えず，複雑な入れ子のような重層性を有する。地域スケールがミクロになるほどに協力や対抗の磁力が強まり，また，対抗関係には「予定調和的対抗関係」と「対立的対抗関係」とがあって，後者は序列関係の中に潜在的に内包される。祭礼研究においては序列・協力・対抗関係全体を包括的に捉える必要があるとする。

第7・8章は，近世において京郊の民俗行事・芸能となった六斎念仏の実態・復原を行い，さらに地理的分布，担い手の地理的行動といった空間構造の考察を通じ，都市京都と周辺地域との文化的結合関係を解明する。

実態・復原にあたっては，六斎念仏に対する規制形態を考察し，近世前期から存在する，為政者の服喪期間などの鳴物規制にともなう制限と，18世紀末から現れる娯楽的な遊芸付加の禁止とに大別する。前者については，江戸中後期以降，芸能化と関連する現象とみられる京都市中での大規模な棚経には個別規制が加えられ，六斎念仏の担い手としての近郊村落の農民だけでなく，観衆・聴衆である町人にも履行義務が負わされたとする。後者は統括寺院である干菜寺・村方指導者層などから発せられるが，念仏六斎と芸能六斎とを演じ分けることが可能となり，遊芸規制をかいくぐる動きを「戦術」と位置付ける指摘がなされる。

続けて，六斎念仏の空間構造に焦点があてられ，六斎念仏講中の分布論的・行動論的アプローチがなされる。江戸前期には京都市中から比較的遠隔の社寺で，その近郷村落の農民による講中の物詣が行われていたが，江戸中後期以降に行動形態が変化する。市中への棚経が盛んになり，洛東の清水寺が共通の「最終目的地」と定まると，六斎念仏の芸能化現象とも密接な関係を持つ，多数の観衆を前にした競演がなされた。幕末には壬生寺・北野天満宮でも同様の行動形態が確立され，講中の分布も，比較的遠隔の講中が消滅し，近郊村落への集中化へと進んだ。それは六斎念仏講中が京都市中との関係を強めたものと評価される。すなわち，京都の近郊村落に対する文化的影響力，都市と近郊村落との文化的な結合関係の反映である。類似の現象は神社祭礼でも見られると言い，「行動文化」の普及・大衆化といった，より大きな社会史・文化史の流れの中に位置づけられると見通していく。

終章では，第一に御霊祭・今宮祭・六斎念仏の実態・変遷（第2・4・7章），第二にこれら祭礼と地域社会の関係（第3・5・6・8章），第三に京都における祭礼文化（史）の全体像（第1章）を論じてきた本書の成果を概括する。最大の成果は，中近世京都における祭礼文化全体の動向をふまえつつ，これまえ未解明であった御霊祭・今宮祭・

六斎念仏の実態・変遷の究明であるとしつつ，さらに祭礼の空間構造に注目した結果として，空間構造が有する時間的ないし歴史的重層性や，地域スケールごとの重層性，小地域間の対抗関係，都市の文化的影響力の顕現する文化事象の選択・淘汰などの新知見が整理される。あわせて，日常的な社会構造との比較考察と相互関係の解明，地域を超えた職縁共同体の役割，中近世京都における都市祭礼文化（史）の比較考察と全体像構築などが今後の課題として提示される。

以上のように，本書は歴史地理学に立脚し，中近世京都の祭礼文化を実証的に解明しつつ，著者の方法論的構想の実現が図られている。

ところで，評者は歴史学を専門とするが，研究の初心として，地域（とくに下野日光山と門前町）の祭礼文化とそれを支える地域社会の民俗・協同態への関心があり，その延長で，京都の祭礼文化（史）にも関心を寄せている（実は2003年以来，昨年まで毎年，12年連続で祇園祭を訪れている）。八坂神社だけでなく，北野天満宮や伏見稲荷大社の氏子圏なども知ると，「京都」とは一括りにできない「地域」（著者のいう氏子圏）が存在することを強く認識するようになった。その過程で評者が得た疑問のいくつかは，著者の既発表論文および本書の示唆に富む実証によって解決することができた。本書は，歴史地理学的手法を最大限に生かすことによって，京都の祭礼文化（史）研究のみならず，都市史・都市社会史研究をも大きく前進させており，今後，これらの分野で重要な先行研究となるだろう。

なかんづく同時代の文献史料を批判的に使用することはもちろん，絵画史料，後世の記録，民俗資料をも的確に用いることによって，御霊祭・今宮祭・六斎念仏個々の豊かな実態と変遷の解明を進め，手堅く精緻に実証したことは，著者が終章で述べる通りである。それらの実証の過程で明らかにされた貴重な新知見や見通しには，京都の中の「地域」を知るうえで多くの示唆を与えられた。文字通りの好著と言えるだろう。

とはいえ，かかる精緻な研究，かつ学問的に大きな展望がなされている研究書は，さらなる疑問を呼ぶのが常である。些末ながら，評者が感じた本書の問題点として，以下に３つを挙げさせていただきたい。

第一に，事例として挙げられる御霊祭・今宮祭・六斎念仏が各章に配置されるが，事例としての必然性，事例相互の連関性が読み取りにくいように思われる。３つの祭と関わる地域社会が同時期にどのような展開をしたのか関心を引くが，それぞれ祭ごとに対象とする時期が異なるため，比較しにくい。著者が今後の課題に挙げる京都の祭礼文化（史）の全体像を想うとき，個々の祭礼を比較することは不可欠であるように思われる。本書のような章構成となった理由には，史料的制約があると予想されるので，無い物ねだりとなる恐れを感じつつも，この点は指摘せねばなるまい。

第二に，祇園祭を事例としたのは第１章の鉾に関する考察においてのみであるが，著者も課題にあげるように，やはり著者の視点による祇園祭像が知りたくなるのである。京都祭礼文化（史）の全体像を語るうえでは祇園祭を看過することはできないし，「祭礼の空間構造」からアプローチされ整理されるであろう祇園祭像は，想像するに魅力的である。

第三に，「過去の世界」を理解する歴史地理学ならではのアプローチを考えるさいに，筆者の説くアプローチをすることによって，地域社会の日常をどのように描くことが可能になるのだろうか。序章で丁寧に提起される方法論は興味深く，歴史学においても，社会史・生活史に適用すべき考え方であり，傾聴しなければなるまい。しかし，終章での総括で述べられるその効用がやや物足りなく感じるのは専門を異にするためなのだろうか。

祇園祭の場合，犬神人に代表される山鉾町以外の場に暮らす職能民の役割が既に指摘されている。本書で扱われている神社の氏子圏，講中の村々などの場合，かかる射程に入るべき歴史的な身分，職能民などが存在しているのか否か，寡聞にして知らないが，「空間構造」を見るためには不可欠な要素と思われる。著者の視点は，本書ではあまり参照されていないが，谷直樹・増井正哉[1]，谷直樹[2]，岩間香・西岡陽子[3]ら建築史の分野における祇園祭研究で取り上げるような，都市京都に暮らす住民の日常と祇園祭という非日常を総括して取り上げる姿勢とも関連しているように思われる。対象とする事例のおもしろさゆえに，住民の日常の相貌を知りたく思うのは，読者として欲張

りすぎるだろうか。

同じ祭礼を取り上げた章と章との間で重複する叙述も気になったが，それはさておき，以上に掲げた評者が感じた些末な3点については，著者が終章に掲げる今後の課題にも通じているように思う。すなわち，著者の示す今後の課題が解決されれば氷解するものと思われ，次なる研究成果の公表が待たれる。

かつて評者は，とある歴史学研究者から，京都の研究は京都で暮らす研究者にはかなわない，関東から挑戦しても負けるよ，と冗談交じりの御指摘をいただいたことがあり，そのために京都を語ることに一抹の恐怖を覚える。それは，日常がわからなければ，祭礼や一回性の事件を見ても理解しにくいとの意と解されるが，本書を読んでその思いをいっそう強くした。評者には，豊かで新鮮な京都の祭礼文化（史）を本書によって知ることができたように思う。が，その思いゆえに，本書評が妥当な内容となったのか，いささか心許ない。しかし，本書が中近世京都の都市史・祭礼文化（史）研究の前進に寄与する好著であることを確信する。著者に対しては拙い書評となった非礼を謝しつつ，また，読者には御一読を乞いたい。

（山澤　学）

〔注〕

1）谷　直樹・増井正哉編『まち祇園祭すまい―都市祭礼の現代―』思文閣出版，1994。

2）谷　直樹『町に住まう知恵―上方三都のライフスタイル―』平凡社，2005。

3）岩間　香・西岡陽子編『祭りのしつらい―町家とまち並み―』思文閣出版，2008。